

♪ 2019年度 **poco a poco** ♪

Nr. 20 2020年1月9日(木) 文責:プファイル・辰巳

明けましておめでとうございます!

2020年の幕開けです! 令和2年の元旦をみなさんはどこでお迎えになったのでしょうか? ドイツの自宅で、あるいはヨーロッパのどこか旅行先で、はたまた里帰り中の日本でしたでしょうか。

年頭に当たって、今年の目標はしっかり立てられたでしょうか。私の今年のモットーは「健康第一。そして、何もかもできなくても、何か一つはできる!」です。一步一步の積み重ねを大切に、今年も歩を進めていきたいと思っています。本年もどうぞよろしくお願いします。



音楽こぼれ話 <2020年はベートーヴェン生誕 250周年>

2020年は、クラシック音楽界では「ベートーヴェンの年」です。何故かという、ルードヴィヒ・ファン・ベートーヴェンは、1770年12月16日生まれなので、今年が生誕250周年に当たるからです。

日本では「楽聖」などとも呼ばれている大作曲家のベートーヴェンは、ドイツのボンという町に生まれました。ライン河沿いにあるそんなに大きくない都市ではありますが、東西分断時代の西ドイツの首都でありました。ベートーヴェンの生家は現在でも残っており、博物館として見学できるようになってます。

ベートーヴェンのご先祖様はオランダ人でした。ルードヴィヒの祖父の時代に、宮廷に使える音楽家としてボンに移住してきたそうです。祖父も父も宮廷で歌う歌手でした。父については酒癖がひどかったという悪評が残っていますが、息子のルードヴィヒの音楽的才能には気づいており、それなりの音楽教育を受けさせていたようです。

1786年、ルードヴィヒ少年は音楽修行のため、ウィーンを目指しますが、尊敬して

いたモーツァルトに会えるかどうかも定かでないうちに、母の病状悪化のためボンに呼び戻されてしまいました。ウィーン留学の夢はひとまずとん挫です。

1792年、ロンドンからの帰路ボンに立ち寄ったハイドン先生に会い、ベートーヴェンは再びウィーン留学の夢を膨らませます。4か月後にはウィーンに移住し、その後はついに故郷のボンに戻ることなく、音楽の都で生涯を終えることになります。

ウィーンで暮らし始めたベートーヴェンは、まず名ピアニストとして、活躍し始めました。もちろん作曲もしていました。

しかし、周知の通り20代後半から、音楽家としては致命的な「難聴」に悩まされ始めたベートーヴェン。一度は絶望して、遺書までしたためました。これは「ハイリゲンシュタットの遺書」として残っています。

結局自殺には至らず、この苦難を乗り越え、ベートーヴェンはこれ以降、「傑作の森」と言われるほど次々と名曲を生み出しました。「英雄」「運命」「田園」「第9」などの有名な交響曲しかり、美しいピアノソナタの数々もしかり。そして迎えた40歳代には、ついに全聾となってしまいます。

それでも1826年、56歳で世を去るまで作曲をし続けたベートーヴェン。その楽曲には、過酷な運命や苦悩と戦いながらも、決して屈することのない強靭な生命力のような輝きがちりばめられています。ベートーヴェンの葬儀には2万人もの人々が参列し、その中には、かのシューベルトも居たということです。

ウィーン古典派の全盛期の立役者となり、ロマン派音楽への架け橋ともなる名曲を生み出したベートーヴェンの作品は、今年、ボンやウィーンに限らず、各地のコンサートホールや音楽祭で演目の中に取り入れられることでしょう。

ほんのちょっとだけ 演奏会情報

1月14日(火) アルテオーパー・大ホールにて

20時から ウィーン・シンフォニカーとR.ブーフビンダーの共演で
ベートーヴェンのピアノ協奏曲 第1番と第5番

